

2016年7月。私は、文化人類学者の本多俊和(スチュアート ヘンリ)氏とともに、グリーンランド中西部の小島キツイスアサイト(Kitsissuarsuit)にいた(図1)。私たちは、ある共同研究プロジェクトの一環で、グリーンランド捕鯨の歴史的展開を実証的に明らかにする調査・研究に携わっていた。プロジェクトの射程は、捕獲物の分配・流通・利用・消費、海洋資源の共同管理、国際的規制が現地の捕鯨に及ぼす影響、捕鯨推進・反捕鯨に係わるローカルナレッジなど、広範囲におよぶものだった。このなかで、私たちの関心は、捕鯨史の観点から、グリーンランド・イヌイト(海生・陸生哺乳類の捕獲を主たる生業とする先住民族)の世界観を理解してみるところに置かれていた。

「世界観」などと書くと、雲を掴むような話に聞こえるかもしれない。しかし、私たちの目指すところは、グリーンランド・イヌイト社会における人間と自然の共生的(互酬的)な関係の現在地を、出来得る限り自前のファクトを記述的に構築しながら、探究することにあつた。

**狩猟と儀礼**

しばしば指摘されてきたことだが、グリーンランド・イヌイトの世界観では、(霊)魂と訳されるイヌア(inua)が万物に宿り、動物の世界と人間の世界の間を循環する宇宙的秩序が維持されてきた。ここでは、万物の魂の数が開闢以来定められ、一つの魂が循環できなければ、その魂、ひいてはその種の存在は永久に消滅するとされてきた。それゆえに、循環サイクルの維持は、イヌイトの生と死に直結する問題だった。

このとき、中核的な機能を果たしてきたのが、人間が獲物のイヌアを解放して、丁重にあの世へ送り返す行為としての狩猟儀礼(hunting rituals)や祭儀(ceremonies)だった(スチュアート「食料分配における男女の役割分担について」p.121)。生存法則とでも呼びうるイヌイトの礼式として、儀礼は位置付けられてきた。狩猟と儀礼とが紐づけられることで成り立つ、人間-自然の共生空間は、遺伝学的にグリーンランド・イヌイトと同じルーツを持つ、チュコカ半島からアラスカ、カナダを経て、グリーンランドへと至る、総称としてのエスキモー社会全体に認められるものだった(図2/小澤・中丸・高橋編著『アイスランド・グリーンランド・北極を知るための65章』p.25)。

もちろん、狩猟-儀礼の世界観は、植民地支配が北極の先住民社会にまでおよんだ18世紀以降、大なり小なり変質(acculturation)している。狩猟儀礼も、

たとえばカナダにおいては、生存法則という性格をふくみながら、それを戦略的に「見せる」ことで、先住民としてのアイデンティティを維持・強化していく手段になっている。つまり、儀礼という行為は意味を持ち続けているが、その役割は時代によって異なる様相を見せてきた、ということである。

こうした世界観の基層とその変質過程は、グリーンランド・イヌイトの事例をふまえることで、どのような輪郭を辿ることができるだろうか。2016年は、そんな思いから、実際に捕鯨に従事してきたフルタイム・ハンターへの質的なインタビューを行った。キツイスアサイトは、その中でも最重要地の一つだった。それは、当地が、ミンククジラ、ナガスクジラ、ザウクジラなどの大型クジラが回遊する豊富な漁場として、多くの先行研究で取り上げられてきたからである。実際にキツイスアサイトでは、グリーンランド・イヌイトによる捕鯨が行われてきた。同時に、18~19世紀頃は、デンマーク主導の植民地捕鯨や、オランダをはじめとするヨーロッパの捕鯨会社が捕鯨基地を置くなど、捕鯨の一大拠点にもなっていた。

インタビュー調査は、質問項目を決め、回答内容に即して相手の真意を掘り下げる(半)構造化インタビューではなく、コーヒーを飲みながらチャットするといったラフなものが多かった。事前にアポイントを取る場合もあれば、道ですれ違った人に話しかけ、場合によっては家に招かれるなどしてインタビューを行うこともあった。調査は、ディスコ湾周辺域のアーシアート(Aasiaat)、ケッケルタルスアック(Qeqertarsuaq)、そして北部のカーナーク

化された、もしくは喪失している可能性であった。この「発見」は、いくつかの先行研究で指摘されてきた論点をアップデートする機能をもつものであった。

たとえば、カランとサイヤセン(Arne Kalland and Frank Sejersen)は、18世紀の植民地化以降、自然に対する合理(功利)的なアプローチ(utilitarian approach to nature)がグリーンランド社会で内面化されたことによって、儀礼行為が簡略化されたことを指摘していた(Kalland and Sejersen. Eds. Marine Mammals and Northern Cultures. p.267)。ここでいう合理的なアプローチとは、結果として得られる利益の程度によって、そこに至るまでの過程のあるべき姿が決定される考え方を意味する。カランらによれば、グリーンランド・イヌイト社会では、上述した人間と自然の共生的な関係と、自然に対する合理的な考え方が合流し、両者が自然化した結果、生存のための法則として位置付け



図1

(Qaanaaq)など、広範囲に行った(図1)。

**儀礼の簡略化、もしくは喪失**

2か月のフィールドワークを終えて、(その前後に行った計6回のフィールドワークで得た知見を加味しつつ)うっすらと浮かび上がってきた輪郭は、グリーンランドでは生存と直結する行為か、自己呈示的なそれかにかかわらず、儀礼が簡略

られてきた儀礼行為が、不合理な迷信(irrational superstitions)として変換され、簡略化、あるいは喪失したと指摘していた。

儀礼の簡略化・喪失については、1990年代後半に、ヘルムス、ヘルツ、カペルら(Helms et al.)によってもその可能性が示唆されていた(Helms,

Hertz and Kapel. The Anthropology of Community-Based Whaling in Greenland. pp.80-81)。ヘルムスらの指摘は、グリーンランドにおける民間伝承(folklore)の存在は認めつつ、通常は捕獲行為の前後に執り行われる儀式(ceremonies)や祭祀(feasts)が見当たらない(not found)というものであった。

グリーンランド・イヌイト社会における人間—自然関係の基層とその変質を理解する上で、これらの先行研究が有用であることは論を俟たない。しかし、問題提起の域を出るものではなかったことも付言しなければならない。近年の市場経済志向の浸透により、元来の生



図3

業活動の在り方が変質しつつあること、そして、人間による利活用を目的に海生哺乳類が創造されたとするキリスト教的な考えの浸透の影響には言及される(Kalland and Sejersen. p.140, 144)。しかし、その解法を学術的に、且つ分野横断的に探求していこうとする営為は、管見の限り、世界的に見ても、手付かずのままだった(Sonne. Worldviews of the Greenlanders. p.xv)。

知見が消費されてきた——、ということであった。北極研究と北欧研究の往還が驚くほどに見られなかったことは、知のたこつぼ化を促してきた。グリーンランドとデンマークの研究者の間ですら通じない言葉で、伝わらない知識を生産してきたともいえた。人選の結果、執筆陣の大半はデンマーク、延いては北欧研究の専門家とした。それは、グリーンランドを研究対象とする研究者が少ないこともあるが、これまでの環境的制約を相対化しつつ、拡散した知を縫合し、グリーンランド研究とデンマーク研究との創発を促すことを目指そうという想いがあったからである。

プロジェクトの起点となったのは、グリーンランドの歴史的な身体、つまりグリーンランドという場所それ自体だった。グリーンランドは、今からおよそ5,000年前に、極東ロシア・チュコカ半島を出発し、東へと歩みを始めたエスキモーの終着地だった(図2)。同時に、北ヨーロッパからグリーンランドへと新たな地平を求めた10世紀のノース人(ヴァイキング)および18世紀の宣教団の目的地でもあった(図3/Felbo. Takornartat. p.5)。2017年には、東西の合流の地として成り立つ、グリーンランド南部のクヤター地区が、ユネスコ世界文化遺産に登録されている。エスキモーとノース人の合流によって育まれた農耕、放牧、海生哺乳類の狩猟を基盤とする文化的景観——人間と自然環境との交流によって育まれた

景観——が、登録の根拠となった。

本ブックプロジェクトでは、まさにこうしたグリーンランドの混淆的な歴史的な身体性の解法を、通時的に探求することを目指している。2023年の刊行に向けて鋭意作業中である。

<目次(2023年1月31日現在)>

【はじめに】(高橋美野梨)

【1章】節合×分節:論点整理と本書の趣旨(高橋美野梨)

【2章】イヌイト×ノース人:中世グリーンランドの異文化接触とレジリエンス(小澤実)

【3章】魂×神:グリーンランドにおけるキリスト教宣教と伝統の改変(須藤孝也)

【4章】民族誌×グリーンランド植民地主義(本多俊和)

【5章】時間×空間:文化へのタイムトラベル(Søren Rud/訳・高橋美野梨)

【コラム】18世紀、デンマーク海洋帝国、グリーンランド貿易(仮)(井上光子)

【6章】セドナ×人魚姫:女性人魚の系譜の批判的考察(中丸禎子)

【7章】国家×共同体:デンマーク国家(Ulrik Pram Gad/訳・高橋美野梨)

【Bridging (con-)text】グリーンランドとの「結び目」(高橋美野梨)

【8章】ヒト×クジラ:捕鯨という行為の捉え方(中園成生)

【おわりに】(高橋美野梨、イーリヤ・ムスリン)

### 本を編む

私は、こうした経緯から、ブックプロジェクトを立ち上げることにした。先行する上述のプロジェクトから切り離し、また捕鯨という特定の要素をも超えて、グリーンランドの来し方を、通時的、且つ分野横断的アプローチから描きたいと思うようになった。そのための仲間(分担執筆者)探しをはじめた。この過程で(再)認識したのは、何事も分類したがるアカデミアにあって、これまで北極研究の対象となってきたグリーンランドと、北欧研究の範疇にあったデンマークとは、それぞれの「所属先」で知見を蓄積してきた——あるいは



図2

高橋美野梨

北海学園大学法学部政治学科准教授。博士(国際政治経済学)。近著に Borders in East and West: Transnational and Comparative Perspectives (Berghahn

Books, 2022), "The Inuit of Greenland: Doing Area Studies on the Compromise between Reciprocity and Utility" (Inter Faculty, Vol.11, 2022), "Inklusion, imagepleje eller nødvendighed? Basepolitik i Grønland og

politisk kultur i Danmark" (Økonomi & Politik, Vol.94, No.2, 2021), Exploring Base Politics: How Host Countries Shape the Network of U.S. Overseas Bases (Eds., Routledge, 2021) など。